７　「」　─近世の仮名草子（説話集）

17年度　京都女子大学

★　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

　波羅のの地蔵のことを聞くには、あはれ①にも尊くもおぼゆ。ａそのかみ、上天皇の御時②にや、侍の浪人して、久しくわびて住む夫婦あり。一人の娘ありけり。日ごろはさしもゆゆしくありけるが、・・太刀・刀までなして、とかくすれども、身もありつかで、今はの煙Ａだに立てかねたることにて、夕は空しくふせりＡぬ。ある朝いかにもＸうるはしき飯をととのへて、男に供へて食はせけり。男あやしみて、「かかる飯は今朝しもあるべきおぼえもなし。いかにしてか米は求めたる」と言へども、妻さら③に明かさず。妻のかづきたる帽子のはづれより短き髪のほろほろとこぼれ出でたるを男見つけて、娘を呼びてたづねし④に、「この間何もかも代なして、母の鏡まで皆売りアたまへり。その間には、いかならむ所にもありつきイたまへかしと、神仏にも祈りウたまひしが、髪を切りて人に売りつつ、そのあたひにてととのへエたまひしもの」とて、さめざめと泣く。男聞きて手を握りつつ、「くちをしくも妻の鏡を始めて頭の髪まで切りて売りつつ、我を育みて、またその色をも見せＢぬいとほしさよ。①かかる心ざしある女房を、我ゆゑわびしき目みする悲しさよ。Ｙ我だになくは、またｂことひとに身をも寄せて、心やすく世をもしオたまへかし。Ｚこれを食ひたればとて、末とげて花咲くべしともおぼえず」とて、飯ものどに入らず、涙は滝のごとくこぼれて、胸せかれつつ、ｃせむかたなかりければ、

　※今は世にあるかひもなき身をすててせめては君がなぐさめにせむ

と書き置きて、②行方なく失。妻は足ずりをして慕ひけどもかひなし。かくて月日へて、妻心地わづらひてみまかりＤぬ。娘は母のむなしき頭をの上にかきのせ、「自らｄ人とならばわびしきながらもいかにも御心をもなぐさめａ奉らむとこそ思ひしに、それはあらましごとになり、に預けていかになれとか、自らを捨てては行きたまふ。せめて今ひとたび御目開きて、自らここにあるかとＢだにｂのたまへ」とて、泣きけれどもかひなし。日暮れになりて老僧一人来たり、娘をなぐさめて、母のかばねを背にかき負ひにてうづみたまふ。娘、御布施とて参らすべきものなしとて、髪を切りてｃ奉る。老僧涙を流し受け取り、「わが寺は六波羅なり。たづねて来よ」とて帰りたまふ。娘、六波羅に行きて見れども、老僧もｄおはせず。地蔵の御手に、髪の切りたるを巻きて立ちたまふ。③御足はさながら土によごれてあり。老僧は地蔵にておはしけると疑ひ晴れて、尼になりＥぬ。今の鬘巻の地蔵、これなり。

注１　六波羅の鬘巻の地蔵＝京都市東山区にある六波羅蜜寺に安置されていた、髪の毛を手に巻き付けた地蔵。

注２　村上天皇＝第六十二代天皇（在位九四六～九六七）。

注３　青侍＝身分の低い若侍。

注４　櫛笥＝櫛や化粧道具を入れる箱。

注５　鳥辺野＝現在の京都市東山区にあった墓地。

問１　―線部ａ～ｄの意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～オの中から選べ。

ａ　「そのかみ」

　ア　某日　　イ　往昔　　ウ　祖先　　エ　当代　　オ　遺髪

ｂ　「ことひと」

　ア　身分ある人　　イ　特別な男　　　ウ　都の人

　エ　別の男　　　　オ　才能ある人

ｃ　「せむかたなかりければ」

　ア　自らの責任を果たしようがなかったので

　イ　どうしたらよいかわからなかったので

　ウ　激しい苦悩に堪えられなかったので

　エ　誰かを責めるというわけにもいかなかったので

　オ　何をしても手に付かなかったので

ｄ　「人とならば」

　ア　生き返ったら　　　イ　一人前になったので

　ウ　元気になったら　　エ　正気にもどったので

　オ　大人になったら

問２　＝線部Ａ・Ｂの「だに」を説明した次の文について、後の（１）と（２）の各問に答えよ。

Ａの「だに」が、「朝餉の煙」という程度の　１　ものを例として挙げ、より　２　ことがらの存在を　３　させるのに対して、Ｂの「だに」は、  
　４　を示し、強調しながら、　５　の意を表す文に用いられている。

（１）　１　・　２　・　４　に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から選べ。

　　ア　１　軽い　　２　重い　　４　最大限

　　イ　１　軽い　　２　重い　　４　最小限

　　ウ　１　重い　　２　軽い　　４　最大限

　　エ　１　重い　　２　軽い　　４　最小限

（２）　２　・　５　に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次のア～キの中から選べ。

　　ア　詠嘆　　イ　類推　　ウ　願望　　エ　確信

　　オ　回想　　カ　拒絶　　キ　絶望

　　３＝〔　　　〕　　５＝〔　　　〕

問３　次の（１）・（２）の助詞または助動詞を含んだ文節を、問題文中からそれぞれ一つずつ抜き出せ。ただし、（１）については問題文全体の中から、（２）については問題文の和歌※以降の中から、抜き出すこと。

（１）結びが消滅している（流れている）係助詞

　　［　　　　　　　　　　］

（２）あることに初めて気付いた際の詠嘆を表す助動詞

　　［　　　　　　　　　　］

問４　問題文中の敬語について、次の（１）と（２）の各問に答えよ。

（１）----線部ア～オの「たまふ」の中から、敬意の対象が他と異なるものを一つ選べ。

　　［　　　］

（２）問題文中から「奉る」以外の謙譲語を一つ選び、終止形で記せ。

　　［　　　　　　　　　　］

問５　　　線部①「かかる心ざしある女房」とあるが、具体的に女房のどのような行為が「心ざしある」ものとして夫の胸を打ったのか。その女房の行為を記述した次の文の　Ａ　・　Ｂ　に入る語句を、それぞれ五字以上八字以内（句読点を含む）で答えよ。

ついには自らの髪を売ってまで夫のために立派な朝食を準備し、しかも、そのことを一切口にせず、また、　Ａ　ことによって　Ｂ　を隠した。

Ａ＝［　　　　　　　　　　］

Ｂ＝［　　　　　　　　　　］

◎問６　　　線部②「行方なく失せぬ」とあるが、なぜ、そのようにしたのか。その理由がわかる一文（和歌以外）を問題文中から選び、その最初の五文字（句読点は含まない）を答えよ。

［　　　　　　　　　　］

問７　　　線部③「御足はさながら土によごれてあり」とあるが、それはなぜだと推測されるか。そのことを説明した次の文の　　　　に入る二字熟語を答えよ。

老僧すなわち地蔵が母を　　　　した時に、土で足が汚れたのだと推測される。

［　　　　　］

◎問８　問題文の内容と一致しないものを、次のア～キの中から二つ選べ。

ア　苦労を重ねる母親の姿を間近に見つつ、娘は、少しでも母親の力になりたいと思っていた。

イ　怠惰な男のあまりに無責任な振るまいに対しても、妻はただひたすら寛大であり続けた。

ウ　女性にとって髪は非常に大切なものであって、それを切るのには相当の覚悟が必要だった。

エ　鬘巻の地蔵は大変慈悲深く、すべての苦難も実は娘を仏道に導くための地蔵の方便であった。

オ　娘の切って渡した髪が、老僧が実は地蔵であったということを示す印象深いしとなった。

カ　男の自己犠牲的な行動は、妻を思いやってのものであったが、決して妻を幸福にはしなかった。

キ　毎日の食事にも困るほどの極端な貧しさが、両親と娘の三人家族を崩壊へと追いやった。

問９　次の漢文は、問題文の末尾部と同様の内容を記したものである。―線部をすべてひらがな（歴史的仮名遣い）の書き下し文に直せ。

娘 レ レ、随 。 「御 僧 者 。」 「二於 六 波 羅 堂 之 一。」 娘 参二 地 蔵 一、三御 二 一。感 喜 敬 、発 而 レ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　］

問10　次の文の　１　・　２　に入る作品名を、それぞれ後のア～クの中から選び、記号で答えよ。

六波羅蜜寺では地蔵信仰が盛んで、例えば、『　１　』にその専横ぶりが大きく描かれる清盛の夢に、同寺の地蔵が現れ、ある兵士の処刑を思いまらせたという話が、『　２　』の著者でもある無住の著した『聖財集』に掲載されている。

ア　平家物語　　イ　閑吟集　　　ウ　太平記　　エ　宇治拾遺物語

オ　方丈記　　　カ　保元物語　　キ　沙石集　　ク　日本霊異記

１＝［　　　］　　２＝［　　　］

【確認問題】

１　傍線部①～④の「に」の文法的説明として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　断定の助動詞「なり」の連用形

イ　副詞の一部　　ウ　助詞

エ　形容動詞の連用形活用語尾

①［　　　］　　②［　　　］

③［　　　］　　④［　　　］

２　波線部Ａ～Ｅの「ぬ」を説明した次の文の空欄を埋めよ。［　］にはＡ～Ｅの記号を、（　）には文法的意味を答えよ。

［　　　］の「ぬ」だけがⅰ（　　　　　）の助動詞で、他はすべてⅱ（　　　　　）の助動詞である。

３　　　　ａ～ｄの敬語の説明を、次のⅠ～Ⅲの語群から一つずつ選んで答えよ。

Ⅰ　敬語の種類

　ア　尊敬語　　イ　謙譲語

　ウ　丁寧語

Ⅱ　本動詞・補助動詞の区別

　ア　本動詞　　イ　補助動詞

Ⅲ　敬意の対象

　ア　夫（父）　イ　妻（母）

　ウ　娘　　　　エ　地蔵（老僧）

Ⅰ　ａ［　　　］　ｂ［　　　］　ｃ［　　　］　ｄ［　　　］

Ⅱ　ａ［　　　］　ｂ［　　　］　ｃ［　　　］　ｄ［　　　］

Ⅲ　ａ［　　　］　ｂ［　　　］　ｃ［　　　］　ｄ［　　　］

【補充問題】

４　二重傍線部Ｘ「うるはしき飯」は、妻がどのようにして準備したものか。その答えとして適当な箇所を本文中から二十五～三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えよ。

最初＝（　　　　　　　　　　）

最後＝（　　　　　　　　　　）

５　二重傍線部Ｙ「我だになくは」、Ｚ「これを食ひたればとて」をそれぞれ正確に現代語訳せよ。

Ｙ＝［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

Ｚ＝［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

【解答】

問１　ａ＝イ　ｂ＝エ　ｃ＝イ　ｄ＝オ

問２　（１）＝イ　（２）３＝イ　５＝ウ

問３　（１）＝なぐさめ奉らむとこそ　（２）＝おはしけると

問４　（１）＝イ　（２）＝参らす

問５　Ａ＝帽子を被る（５字）　Ｂ＝髪を切ったこと（７字）

問６　我だになく

問７　埋葬

問８　イ・エ

問９　いづくにあるか（や）と

問10　１＝ア　２＝キ

【確認問題】

１　①＝エ　②＝ア　③＝イ　④＝ウ

２　Ｂ・ⅰ＝打消・ⅱ＝完了

３　ａ　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝イ　Ⅲ＝イ　ｂ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝ア　Ⅲ＝イ

　　ｃ　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝ア　Ⅲ＝エ　ｄ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝ア　Ⅲ＝エ

【補充問題】

４　最初＝髪を切りて　最後＝まひしもの

５　Ｙ＝私さえいなければ　Ｚ＝これを食べたからといって

【現代語訳】

　六波羅の鬘巻の地蔵のことを聞くにつけては、しみじみ悲しくも尊くも思われる。往昔、村上天皇の御代であっただろうか、身分の低い若侍が浪人をして、長らく困窮して住む夫婦がいる。（その夫婦には）一人の娘がいた。普段はそのように極めて貧しく暮らしていたが、（何とかしようと）鎧・兜・太刀・刀まで売って金に換えて、あれこれと工面するけれども、暮らしを立てることができず、今は朝食の準備さえままならないでいる状態で、夕方には（なすすべもなく、三人とも）空しく臥せっていた。ある朝（妻は）きわめて立派な食事を準備して、夫（の前）に供えて食べさせた。夫は不審に思って、「このような（立派な）食事を今朝に限って摂ることのできる（ほどの収入があった）覚えはない。どのようにして米を買い求めたのか」と言うが、妻は決して（その訳を）明かさない。妻が被っていた帽子の端から短い髪がほろほろとこぼれ出ているのを夫は見つけて、娘を呼んで尋ねたところ、「（母は）ここ最近何もかも売って金に換えて、母の鏡まで皆売りなさった。その間には、どのような所にでも（父が）仕官なさ（るように取り計ら）ってくださいよと、神仏にも祈りなさっていたが、（その効験もなく）昨晩髪を切って人に売って、その代金で準備なさったもの（です）」と言って、さめざめと泣く。夫は（それを）聞いて（妻の）手を握りながら、「（夫として）情けないことに、妻が鏡・櫛笥を始めとして頭の髪まで切って売っては、私を食べさせて、またその（苦労の）素振りも見せないいじらしさよ。このような思いやりのある女房を、私のせいでつらい目に遭わせる悲しさよ。私さえいなければ、（あなたは）また別の男に身を寄せて、安心して人生を過ごし（ていけるはずだ、そう）なさってくれよ。（私は）これを食べたからといって、（仕官の）目的を果たして一花咲かすことができるとも思えない」と言って、飯ものどに入らず、涙は滝のようにこぼれて、胸が自然とふさがりふさがりして、どうしたらよいかわからなかったので、  
　　　今はもうこの世で生きていく甲斐もないこの身を捨てて、せめてあなた

　　の慰めにしよう。

と書き置いて、（夫は）行方もなく姿をくらました。妻は足摺りをして（夫を）慕い嘆くがどうしようもない。こうして月日を経て、妻は病気にかかって亡くなった。娘は亡き母の頭を膝の上に抱えてのせ、「自分が（一人前の）大人になったら貧しいながらも何としても（お母様の）御心を慰め申し上げようと思っていたのに、それは叶わぬ願いとなり、（お母様は、私のこの身を、いったい）誰に預けてどのようになれと（思った上で）、私を見捨てて（あの世へ）行きなさるのか。せめて今一度御目を開いて、私がここにいるかとだけでもおっしゃってください」と言って、泣いたけれどもその甲斐もない。日暮れになって老僧が一人やって来て、娘を慰めて、母の遺骸を背負い、鳥辺野で埋葬なさる。娘は、御布施として差し上げることのできるものがないと思って、髪を切って差し上げる。老僧は涙を流して受け取り、「私の寺は六波羅である。訪ねて来い」と言って帰りなさる。娘は、六波羅に行って見るが、老僧もいらっしゃらない。（境内にある）地蔵が御手に、髪で（先ほど娘が）切った髪を巻いて立っていらっしゃる。御足はすっかり土によごれている。老僧は地蔵でいらっしゃったのだなあと疑いが晴れて、（娘は）尼になった。今残っている鬘巻の地蔵が、これである。